

西大佐の乗馬靴は、ご遺族の寄託を受け、秩父宮記念スポーツ博物館が、常設展示している貴重展示物である。安易にお預りすることもできないので、こちらから博物館にお伺いして、お手入れ作業をするのが一番、と決まった。双方に都合の良い日を選び、平成19年（2007）7月8日ということになった。

西大佐の乗馬靴は、つくられてせいぜい70年くらいしか経っていないので、甲革の表面を清潔にすることを主眼にすれば良いと考え、染料までは用意しないで行くことにした。お手入れには、黒の靴クリームで充分と判断したのである。

以下の記述は、「栄光の金メダリスト西竹一とオリンピック馬術」（公益財団法人馬事文化財団刊行）を参考にさせていただきました。

「昭和7年（1932）8月14日、第10回・ロサンゼルス・オリンピックの大会最終日、天気は快晴だった。メインスタジアムは10万の観衆で埋まり、大会最高の栄誉、グランプリ障害飛越競技が始まった。観衆のほとんどが、アメリカのチェンバレン少佐の優勝を予想する中、日本の西竹一中尉（当時）が登場した。

第1第2障害を無事飛越し、難関の第8障害のバンケットも楽に突破し、第10障害でユーカリの枝を積み重ねた横木に驚き愛馬ウラヌスは左へ切るようにして止まってしまったが、西は素早く反転させて再び障害に挑み、今度は思い切り高く飛越して、残りの障害もすべて無過失でゴールした。

10万の大観衆はこの水際立った妙技に魅了され、万雷の拍手が湧き起った。

オリンピック・スタジアムのメインポールに日の丸が揚がり、大観衆は拍手をもってバロン（男爵）西の優勝を讃えた・・・。」

「南方の戦火が激しくなってきた昭和19年（1944）、彼は戦車第26連隊長として硫黄島に転任することになった。ここが最後の地となることを予期していた彼は、赴任に際してオリンピック当時の乗馬靴、拍車、鞭と愛馬ウラヌスのたてがみを身につけて、海を渡ったという。昭和20年（1945）3月21日、馬を愛し、馬術に生涯をかけた金メダリスト西竹一は、太平洋戦争最大の激戦地といわれたこの島で、最後は軍人として職務を全うし、帰らぬ人となった。」

硫黄島指揮官 栗林忠道 辞世の一首

国の為重き^{つとめ}努を果たし得て

矢弾^{やだま}尽き果(て) 散るぞ悲しき



西 竹一とウラヌス